Plan news

プラン・ニュース［2016 Spring］No.101

キーパーソンに聞く

茂木健一郎さん

東京マラソン2016チャリティランナー

子どもと築く、未来のしくみ

Because I am a Girl

キャンペーンがもたらした変化

コミュニティがプランの支援を卒業するまで

フィリピン サザンレイテ活動地域からの報告

発行：公益財団法人プラン・ジャパン

Plan
プラン・ジャパン

キーパーソンに聞く

茂木健一郎さん

●脳科学者

自分の壁を乗り越えることが、社会を変える勇気につながると思います。

脳科学者としてアカデミアからメディアまで幅広く活躍するのに加え、ランナーという面もある茂木健一郎さん。今年はプラン・ジャパンのチャリティランナーとして、東京マラソン2016チャリティに参加。その背景には、インドの女の子を支援したいという気持ちに加え、世界中の人に自分の壁を打ち破って自身の可能性にチャレンジしてほしいという思いがありました。

――東京マラソン2016チャリティでは、プラン・ジャパンのランナーとして参加されました。もともと、チャリティ活動にはご興味をおもちだったのでしょうか。

茂木健一郎さん（以下敬称略）興味があるというか、人としてそういうことをしたいとはずっと思っていました。30代で住んでいたイギリスからの影響も大きいです。街中に当たり前にチャリティグッズを売るお店があったり、「レッド・ノーズ・デイ」というのを定めて国中の人が赤い鼻を付けて貧困や社会格差への支援を訴えたりと、チャリティ文化が根付いていました。自分も彼らのように、あまり気負わずに社会貢献活動に参加したいと思うようになりましたね。

――ランニングはライフワークのひとつと言い切り、ブログなどのメディアでもその魅力を語っていらっしゃいますね。

茂木 はい、小学生くらいからずっと走っています。ベストエフォートでというテンションで、旅先で10キロを1時間くらいかけて走ることもあれば、家からいちばん近いコンビニまで2分だけ走るということもあります。

走り終わったあとは何ものにも変えがたい爽快感がありますし、持久力がつくというメリットがあると思います。また、ランニングは、認知症の発症に関わるとされる脳内のβアミロイドの蓄積を抑えることが示されました。走ることは、アンチエイジングにもつながるんです。

――走ること自体の魅力のほかに、チャリティランにはどのような良い面があるとお考えですか？ プラン・ジャパンのチャリティランナーに申し込まれたときの、「自分自身の壁を乗り越えるということが、ひいては、社会を変える勇気につながっていくように思います」という茂木さんのコメントが大変印象的でした。

茂木 その言葉通りなのですが、社会を変えたいと思ったら、まずは自分自身が何かにチャレンジすることが大切だと考えています。議論より行動で示したほうが世の中は変わります。たとえば、女性のマラソン参加が認められていなかった1966年に、ロベルタ・ルイーズ・ギブスという女性がノーゼッケンでボストンマラソンに参加しました。彼女のこの行動が、女性へのマラソンの門戸開放につながったのです。

誰かが何か壁を打ち破る姿を見ると、人はその姿に共感するとともに自分も壁を打ち破ってみようと勇気づけられるものです。ですから、社会を変えたいなら、参加者全員が必死に頑張るチャリティランのような仕組みは非常に効果的だと思います。「頑張るから寄付してください」という文化が、日本でももっと広がるといいなとも思いますね。

――チャリティランで集まった寄付金は、カースト制度により差別を受けているインドの貧困世帯の女の子に奨学金を贈るプロジェクトに使う予定です。途上国の女の子支援に関しては、どのように関心をおもちですか？

Photos/ 金井塚 太郎

茂木 人権運動家マララさんのお父様の、TEDトークを会場で聴いたことがあります。マララさんがノーベル平和賞を受賞した直後のことで、会場からの「何か特別なことをした？」との質問に彼はこう答えたんです。「たったひとつ、『女の子だからこれはしてはいけないよ』というのは決して言わなかった」と。それが非常に印象的でした。途上国の女の子には確かにガラスの天井があるけれど、周りの人の少しの気づきでそれを取っ払うことができるのだ、と改めて思いましたね。

また、途上国だけではなく日本を含む先進国とされる国にも、まだまだ女の子や女性に対するガラスの天井はあると思います。実際、私がいる科学の世界でも、男女の能力はまったく変わらないのですが、女性科学者は非常に少ないです。この状況が改善され、いろいろなタイプの人が社会の第一線で活躍することで世の中がどんどん変わると思います。

――〝ガラスの天井〟をなくすために、女の子や女性たちが自らできることはあるのでしょうか？

茂木 テクノロジーの進歩で、可能性は大きく広がっていると思います。女性の社会進出においても、産休中の在宅勤務が可能になるなど、寄与は大きいと考えます。この素晴らしい現実に気づき、チャンスや可能性を貪欲に生かしていくことが大切だと思います。

――自らの意識のもちようで、途上国の女の子を含み女性の可能性は広がるということですね。

茂木 はい。そして、ガラスの天井とか壁は女の子だけではなく誰にでもあると思います。でも、実はそれって自分が壁だと捉えている、つまり自分が勝手にできないと思い込んでいるだけだと思うんですよ。たとえば、日本人の高校生がマララさんのようにノーベル平和賞を取る可能性だって本当はあるのに、なぜかそこに壁を作ってしまう。私は今、ソーシャルメディアに英語の動画をたくさんアップしています。イギリスのBBCから、プレゼンターにならないかとお声がかかるのを狙っているから。半分冗談、半分本気です（笑）。日本育ちの人がイギリスでプレゼンターになどなれるわけがない――。このような日本人男性が作りがちな壁を、私も破りたいと思っているんです。

Profile

もぎ・けんいちろう
1962年、東京生まれ。脳科学者。ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー。テレビや雑誌に加えて、twitter や LINE Blog などソーシャルメディアの発言でも注目を集める。走ることをライフワークのひとつとし、今年の東京マラソンは4時間45分59秒で完走した。

東京マラソン2016チャリティでのご協力、ありがとうございました！

今年で10回目の開催となった東京マラソン。2011大会から、さらに多くの人たちを「ひとつにする」ことを目指してチャリティを実施しています。プラン・ジャパンは、そのチャリティ先のひとつとして、毎年多くの方からご支援をいただいています。2016年は、180人以上の方々から寄付をいただき、そのうち140人の方が10万円以上の寄付をして、チャリティランナーとして出走されました。ご参加くださいましたみなさま、どうもありがとうございました！ チャリティランナーの募集は、例年7月から開始します。関心をお持ちの方はぜひ次大会にご参加ください。今大会当日の報告記事はこちらからご覧いただけます。
https://www.plan-japan.org/topics/event/160314run/

志を同じくするマララさんと協働し、女の子たちがアクション！

BIAAG※キャンペーンがきっかけとなった国際ガールズ・デーの制定。
その直前に凶弾に倒れたマララ・ユスフザイさんと、
BIAAGキャンペーンは同じ目標に向かって、さらなる盛り上がりを見せました。

※ Because I am a Girl の略

世界から集まった若者たちとマララさん（前列右から３人目）とプランの BIAAG 大使のフリーダ・ビントーさん（後列右から３人目）

２０１２年の第１回国際ガールズ・デーは、２日前のマララ・ユスフザイさんの襲撃事件という悲劇とともに記憶されることとなりました。マララさんが訴えていることすべてを含んだ、ＢＩＡＡＧキャンペーンは、マララさんとともに同じ目標に向かって協働していくこととなります。

プランが２００７年から始めていたＢＩＡＡＧキャンペーンは、さらにパワーアップ。第１回国際ガールズ・デーが開催された２０１２年７月から２０１４年10月にかけて、「Raise Your Hand」アクションを展開します。これは、世界の女の子の教育とエンパワーメントのために、手を上げる姿を通して国際社会に働きかける参加型アクション。世界の女の子たちも声を上げ、行動を起こし始めました。

２年間で世界70カ国以上２３９万５２６６名が参加、２０１４年10月には国連機関のユネスコ事務局長に届けられました。

「マララ・デー」を企画 マララさんの感動のスピーチ

２０１３年７月12日、マララさんの誕生日に、世界中の教育の普及を訴える「マララ・デー」が企画され、襲撃後初めて公式の場に現れたマララさんが国連で世界の記憶に残るスピーチを行いました。このイベントに、プランのユースたち15人も参加。国連の会議場は若者たちで埋めつくされ、各国の首脳へ女の子の教育を受ける権利が世界中で実現するよう訴えました。

２０１４年７月には、「Youth for Change」で知られるガールズサミットに、当事者たちを代弁する同世代の若者たちが集まり、世界の指導者やコミュニティのリーダーたちへ、女性性器切除と児童婚の根絶を訴えました。プランUSAのBIAAG大使であるフリーダ・ビントーさんが参加し、マララさんとこの問題について話しました。

そして、同年10月、マララさんがノーベル平和賞を受賞。プラン・ノルウェーが祝賀会を共催しました。

２０１５年までに目に見える成果が続々と

現在、ＢＩＡＡＧキャンペーンでは、５８３のプロジェクトが行われています。２０１２年以来、約５００万人の女の子にジェンダーの意識変革を直接働きかけることができました。また、４３００万人の男の子、女の子が、各種サービスや施設、教育を通じて利益を享受できるようになりました。プランは引き続き女の子たちのために活動します。

地域開発を通して、持続可能で公正な社会の実現を

アンネ・ビルギッテ・アルブレクトセン
（プラン・インターナショナル CEO）

コペンハーゲン大学で法律を専攻。国連人口基金（UNFPA）、国連開発計画（UNDP）、デンマーク政府などで、25 年以上にわたり開発、人権、外交、組織改革などに従事。トルコ、アルメニア、ジョージア、アゼルバイジャンに駐在した経験をもつ。

2016年は、昨年の秋に国連で採択された“持続可能な開発目標（SDGs）”がいよいよ始動する年です。すべての人にとって平等で公正な世界を実現させようというこの目標には、先進国であろうと途上国であろうと、同じように取り組む必要があります。

プランは、これまでの開発で取り残されている人々、その中でも大多数を占める女の子に焦点をあて、その支援の中心を担う団体として活動していきます。女の子に価値を置く世界を目指して、その権利を促進し、いま女の子に起こっている不当なことを終わらせなくてはなりません。

BIAAGキャンペーンは、女の子がどこでも学べ、進学でき、自ら決定し、目標を達成することができるように、力関係を変革する世界的な活動です。

権力をもつ立場の人々と一般の住民たち、特に女の子たちとの関係に変化をもたらすことで、誰でも自分の人生に関わる選択を自ら行うことができるようになります。

従来の地域開発に加え、女の子や取り残された人々に焦点を当てる活動を通じ、プランは世界各国ですべての子どもたちのために平等で公正な社会を作る中枢の役割を果たしていきます。

1.プラン・ノルウェーのイベントで　2.ノーベル平和賞授賞式の祝賀会でスピーチをするマララさん　3.BIAAG大使のフリーダ・ビントーさん（左）と
4.国連での記憶に残るスピーチ

プロジェクトで生き生きと活動する女の子の様子が現地から届いています

スタートして半年が過ぎた5つのGirl's Project。進捗報告が届き始めています。
今回はカンボジアの現地リポートと、インドとウガンダで活動に参加している女の子たちをご紹介します。

タイへの出稼ぎをなくしたい
～カンボジア「女の子の自立を助ける職業訓練プロジェクト」視察リポート

リポーター：寺田聡子職員（プログラム部）

電気コースで学ぶ女の子（中央奥）。真剣な表情

2015年12月、このプロジェクトを実施しているカンボジア北西部のシェムリアップ市の公立職業訓練校を訪れました。職業訓練校は、「オールド・マーケット」と呼ばれる人気の観光スポットから車で10分ほどの場所にあります。近くに住んでいたり、裕福な学生はオートバイなどで通学していますが、このプロジェクトの参加者の女の子たちはシェムリアップから離れた農村出身のため、平日は学校の寮で暮らして勉強し、週末は農作業を手伝うために村に帰ります。

3つのコースで専門知識を学ぶ

私が訪問したときには、65人の学生が3つのコース（料理コース50人、接客コース13人、電気コース2人）で学んでいました。電気コースで学ぶ女の子は2人だけで、クラスメートは全員男子です。なぜ電気コースを選んだのかを尋ねると、「村で必要な技術だし、人と違うことを学びたかった」と教えてくれました。「職を見つけてお金を貯めたら、専門知識を学ぶために大学にもすすみたい」とも。

接客コースで学ぶ女の子たちは、日本からきた私に興味津々で、人懐こく、習いたての英語でたくさん質問をしてきました。シェムリアップ市は外国からの観光客も多く、発展しており、ホテルやレストランでは若い従業員がたくさん働いています。ホテルやレストランの職は競争が激しく、雇用されるためには高いスキルが求められます。ホテルやレストランの接客業務に加え、英語とコンピューターは必須なので、他のコースよりも訓練時間が長いのが特徴です。研修が終わるとインターンシップを経て就職先を探すことになります。「私は英語を学ぶのが楽しいです。将来はホテルのフロントで働きたい」と話す女の子もいました。

カンボジアで安全に働く若者を増やすために

このプロジェクト担当者が、カンボジアの農村地域の若者の現状について語った言葉が印象的でした。「農村に出かけると、若者はみんなタイに出稼ぎに行ってしまい、誰もいない村もあります。でも、ほとんどが不法就労なので、雇用主から不当な扱いを受けても警察に訴えることもできない。非常に危険な状態で働いています。カンボジアの若者が自分の国で安心して働けるようにしたい。それには労働市場が求めるスキルを身につける必要があるのです。このプロジェクトは若者にとってとても重要です」

接客コースで学ぶ女の子。笑顔が印象的です

インド
「女の子のための教育推進プロジェクト」

授業を受けるミナティさん（手前）

●**主な活動内容**　カーストやジェンダーに基づく差別が根深いインド。特に指定部族の女の子たちは、65％が中途退学をしています。女の子たちが勉強を続けられる環境を整え、将来の選択肢を広げることを目指します。

奨学金で学校に再び通えるように。ライフスキル教育にも参加しました！

ミナティさん（15歳・10年生）

ミナティさんはインド東部オディシャ県の村で暮らしています。母親は12年前に亡くなり、兄2人と妹1人と父親の5人家族です。ほかの州まで出稼ぎに行くことがある父親に代わって、ミナティさんが家事をこなし、妹の世話もしています。

これらの事情を考慮し、ミナティさんは奨学金の対象者に選ばれ、現在は10年生に進級しています。最初の頃は欠席が多い状況が変わらなかったため、プランが学校運営委員会と家を訪ね、父親に教育への理解を求めました。家事の負担を減らせるように、親戚にも協力を頼んだことで、ようやくミナティさんは学校に戻ってくることができました。

ミナティさんは、奨学金を教科書の購入や補習授業のための費用に充てています。また、クラスメートと一緒に、プロジェクトの一環であるライフスキル教育の活動に参加。「子どもの権利」や性感染症から身を守るための知識など、多岐にわたって学びました。さらに、図書館に蔵書や本棚を増やしたので、ミナティさんを含めより多くの子どもたちが本を読めるようになりました。

ウガンダ
「女性のための生計向上プロジェクト」

備品を受け取る村落貯蓄貸付グループの参加者

●**主な活動内容**　経済的に困難な状況の女性が性産業に従事することもある地域。プロジェクトは若年層の女性たちが村落貯蓄貸付グループに参加することを通して、能力強化を図り、経済力を身につけることを目的としています。

3カ月後には、もっと多くの炭が買えるようになると思います

スコビアさん（23歳）

スコビアさんは、ウガンダ東部トロロ県のマラバ村で暮らしています。前期中学校の3年生で中途退学をしました。その後、2番目の妻として結婚し、幼稚園に通う娘が1人います。夫は1番目の妻を連れて別の場所で働いていますが、スコビアさん親子への生活支援はなく、料理に使う炭（チャコール）を売るのが娘との生活を支える唯一の手段です。

スコビアさんの村では、このプロジェクトに30人の女性が参加し、毎週グループでミーティングを行っています。スコビアさんは8週間貯蓄を続けることができ、グループで運用する金額も大きくなってきました。また、5万4,000ウガンダシリング（約2,000円）を借り入れ、販売用の炭を多く仕入れることができました。生活に必要な石鹸や砂糖、ランプ用の灯油ほか、娘のために教科書や鉛筆を買えるようになりました。

積極的に活動していることから、スコビアさんは村全体の「村落貯蓄」に関わる委員会のメンバーに選ばれました。「もっと多くの若い女性たちが参加できるように役に立ちたい」と語ります。

ご支援をお待ちしています！

Girl's Projectは継続的にも、1回でもご支援いただけます。右記のBIAAGキャンペーンサイトからお手続きください。プロジェクトの進捗については、ウェブサイトで報告しています。メールマガジンでご案内しますので、ぜひご登録ください。

http://www.plan-japan.org/girl/

子どもの権利擁護や自立を支援し、災害にも強い持続可能な地域を実現

皆さまのご支援のもと、プラン・スポンサーシップの活動が地域にどのような効果をもたらしたのかをご報告する連載。第3回は、フィリピンのサザンレイテ活動地域での支援をご紹介します。コミュニティの施設の整備や意識啓発、そして子どもの権利擁護や自立支援を進めたことで、持続可能な自立を果たした地域となりました。

フィリピン・サザンレイテ州はこんなところ

7,109もの島々からなるフィリピンの、ビサヤ諸島の東部とレイテ島の南部の州を指す。狭小な海岸平野に人口が集中し、住民のほとんどは小規模の漁業と農業で生計を立てています。台風などの自然災害が多発する地域でもあります。

プランが建てた保育所で学ぶ子どもたち。プランは保育所の施設と備品を提供。さらに、教師たちのトレーニングにも力をいれました

First Phase 1998-2004

学校をハードとソフト、2つの面から支援

支援開始時は、0～5歳児のうち22.3%しか乳幼児保育を受けていない状況でした。そこで、まずは学校・教育施設の建設と修繕に力を入れました。教育の質の向上などソフト面にも注力し、教師のトレーニングを実施。教師は子どもの権利や成長についての学びを深めることに加え、保育所の運営や教育内容について自分たちで管理することができるようになりました。一方で、親には子どもへの教育の大切さや栄養に関する啓発を実施。これらの結果、教育を受ける子どもの数を増やすとともに中途退学者を減らすことができました。

保健所で身長を測っている男の子。保健所を建てたことで、地域で子どもたちの健康や成長を見守ることが可能になりました

Second Phase 2005-2009

保健施設の整備や減災教育に力を入れて

この間にもっとも力を入れた支援のひとつは、保健です。村にはフィリピン政府が取り付けた給水設備がありましたが各世帯まで給水管を引き込んでいなかったので、村人は水汲みに行く必要がありました。このような状況の改善のため、プランは日本からの支援で2007年に給水設備を設置。131世帯に水道管を引き込みました。さらに、地元行政と一緒に給水設備を管理するようにし、村の利用者たちが主体的に水を管理運営できることを目指しました。また、保健所職員のトレーニングや屋外排泄根絶のための意識啓発なども行いました。

2006年には活動していた村のひとつで大規模な土砂崩れが発生。被害を受けて、住民は元の住居地から新しい場所にコミュニティを移動することとなりました。フイリピンは台風などの自然災害が多く、そのたびに緊急支援が必要となり支援活動が中断することになります。防災への取り組みの重要性が増すなか、プランは避難訓練など、減災教育も積極的に行いました。

子どもたちみんなで手を洗ってにっこり！ プランは給水設備を整えるとともに、衛生習慣のトレーニングにも力を入れました

台風などの災害が起こったときの避難訓練の様子。災害の事前の備えや災害時の対応など、減災教育も進めています

Third Phase 2010-2016

次世代を担う子どもの自立育成に力を入れる

コミュニティの自立には、次世代を担う子どもたちへのサポートが何よりも大切です。学費及び学用品、学校へのアクセスの改善などを通して小学生から高校生まで幅広い生徒が教育を続けられる環境づくりに励みました。加えて、子どもを暴力や人身売買から守るために、さまざまなキャンペーンを実施。ソーシャルワーカーや医師、警察とも連携して、通報システムや被害にあったら駆け込める施設を設立しました。また、日本企業の支援で自動車整備士養成学校が建設されたりと、子どもたちの経済的自立を促進する機関ができたのも大きな前進です。

地域住民と地方自治体、国との連携を大切に研修や意識啓発を進めたことで、村の大人たちは大きな自信をつけました。一方、子どもたちを中心としたグループを立ち上げ、地域の問題解決に取り組むことでコミュニティを担えるスキルを身につけていきました。プラン・フィリピンは、コミュニティの人々が政府や行政機関と連携して、自分たちの力で開発を継続できると判断し、支援から撤退。今後は、ようやく平和への道のりを歩み始めたミンダナオ島へ活動を移します。

子どもたちが中心となって活動するグループがいくつも作られ、子どもの可能性を広げています。女の子たちも集まり、女の子の権利保護や教育の提供を求める活動に参加しました

現地の人の生の声をお届け！ VOICES

ヴァレリーさん
ヤング・ハーツメディアクラブメンバー／13歳

クラブでは、”Regret（後悔）”というタイトルで早すぎる妊娠についてとりあげたショートビデオを作成しました。撮影技術を身につけることができて自信がつきました！　また、プランは机やいすも備えた新校舎を建ててくれたので、感謝しています。

ミソンさん
職業訓練学校　校長

私たちの職業訓練学校は、2012年に設立されました。来年からGrade 11、12（日本の高校2、3年生に相当）の授業も始める予定です。この地域で唯一の職業訓練校のため教室が足りないなか、プランの支援で校舎が作られたことに感謝しています。

リザさん
プランのトレーニングを受けた保育士

プランが提供した子どもの権利や子どもの教育についてのトレーニングコースを受けて、授業計画の立て方やカリキュラム作りなどを学べました。また、水道やトイレなどの幼稚園の設備と教材も整い、衛生教育も進みました。さらに、今では給食ができ、子どもに栄養のある食事を与えることができるようになりました！

数字で見る活動の成果
スポンサーの支援でこんなに変わりました！

● 乳幼児教育を受け初等教育への入学準備が整っている子どもの数
平均 49%（2007年）
▼
女の子 73.88%、
男の子 77.37%（2013年）
6年で飛躍的に上昇しました。

● 未登録児童
702人（2004年）
▼
0人（2009年）
出生登録の完全化を実現しました。

※サザンレイテのプラン活動地域のデータ
※これは世界各地で行われているプラン・スポンサーシップの一例です

災害から子どもたちを守るために、学校ができること

2015年3月に仙台で開かれた第3回国連防災世界会議では、学校での防災対策の推進が約束されました。
プラン・マンスリー・サポーターでは、ミャンマー、ベトナム、ネパールで「災害に強い学校」づくりのプロジェクトを実施。
2015年10月からは、バングラデシュ、中国、パキスタンでの活動が始まりました。

リポーター：寺田聡子職員（プログラム部）

子どもたち自身が取り組む災害に強い学校

「災害に強い学校」世界プログラムでは、防災トレーニングを通じて、子どもたちが学校防災計画づくりや災害のタイプに応じた準備や対応の仕方を学びます。

第2弾の活動国は、バングラデシュ、中国、パキスタンの3カ国。それぞれが、異なる災害のリスクを抱えています。

災害リスクの高い国の一つバングラデシュ

バングラデシュは、洪水が発生するリスクの高さは世界第1位、サイクロンについては世界第6位に挙げられるなど災害リスクの高い国の一つで、実際に自然災害が頻発しています（2011年「国連世界防災白書」）。

プロジェクトの対象は、約44%が1日1ドル以下の収入で暮らしている貧困地域です。こうした地域は被災した際の被害が拡大しやすくなります。

中国の雲南省は、情報アクセスの悪さも課題

プロジェクトを実施する中国雲南省は、国内でも災害リスクの高い地域の一つ。2014年8月にはマグニチュード6・5の地震が発生し、さらにこの4年間に中程度～深刻な干ばつが中央部と北西部で発生しています。

また、全体の96%が山岳地帯に位置し、人口の96%を少数民族が占めます。こういった遠隔地域で暮らす少数民族の子どもたちは、通常の社会サービスへのアクセスが悪く、災害被害のリスクがさらに大きくなります。

パキスタンでは地震、洪水、テロ行為が脅威

パキスタンでは、地震、大雨による洪水、干ばつなどの災害が毎年のように発生。自然災害だけではなく、テロ行為によって学校が破壊されたり、安全な生活が脅かされるというリスクが大きいことも、社会問題です。

パキスタンは人口の約50%が地震帯の上で生活しているといわれています。また洪水も多く、このプロジェクトを実施する地域も2010年の豪雨で被害を受け、生活の再建が課題になっています。

プロジェクト開始ワークショップを実施

今期の活動を始めるにあたり、2015年11月末に、中国、バングラデシュ、パキスタンの3カ国のプロジェクト担当者が集まり、それぞれの活動計画の課題や強みについて学び合い、必要に応じて見直しを行いました。どの国も大きな災害を経験したことがありますが、リスクの高い災害の種類、政府の理解の度合い、実施パートナーは、それぞれ異なります。また、防災教育といっても、学校の活動に取り入れることが最大の課題となる国、どのようにジェンダーの視点を入れるかが課題となる国など、それぞれの国の事情によって課題が異なるため、その国にあったやり方を模索しました。

プラン・ジャパン職員1名を含めたこのチームは、3カ月ごとに電話会議を行い、課題や成功体験について情報交換しています。

スタート時のワークショップで、それぞれの懸念事項について洗い出しをする各国のプロジェクト担当者

各国のプロジェクトの概要

■ バングラデシュ
行政と連携しながら、3,680人の子どもが学ぶ小学校から高校までの10校で学校災害管理員会をつくり、学校全体の防災・減災能力を向上させるための活動を行います。

■ 中国
小学校6校1,800人の児童を対象に、防災教育のための冊子を作成。また、子ども防災クラブの立ち上げと意識啓発活動などを通して、防災・減災への理解を深める活動を行います。

■ パキスタン
小学校15校1,500人を対象に、学校防災委員会の活動を活性化し、県レベルの防災ネットワークも強化。学校内外に働きかけを行います。

ネパール「安全な妊娠・出産支援プロジェクト」

4月の大地震の影響で遅れたものの、本格始動しました

妊婦健診が難しい地域で
巡回健診を進めている、
ネパールのプロジェクト担当者から
現地リポートが届きました。

リポーター：ティヤ・ライ職員（現地プロジェクト担当者）

シンズリ活動地域の巡回健診所前で

2015年4月25日に発生した大地震で、プランのスタッフは緊急支援の対応に追われ、本来プロジェクトを開始する予定の7月にスタートすることはできませんでした。

このプロジェクトを実施しているシンズリ郡も地震で被害を受け、緊急支援活動を行いました。災害でさらに社会サービスの提供が停滞したからこそ、このプロジェクトのニーズはさらに高まり、開始時期は遅れましたが、活動をすすめることにしました。

12月に入ってから、プロジェクト担当者として正式に着任。プロジェクトの開始にあたり、まず保健省とミーティングを行い、専門的な技術面での協力を得ることができました。

さっそく超音波健診装置（以下エコー）の購入に着手しましたが、どのような装置が適切なのか、判断して購入するまでにかなり時間がかかりました。エコーが活躍するためには、それを使う医療従事者が正しい操作法を理解しなくてはなりません。現在、保健行政の協力を得ながら、看護師と助産師へのエコー操作と診断法に関する21日間のトレーニングを計画しています。トレーニング場所となる3つの病院では、準備がすすんでいます。

ご心配をおかけしましたが、これから地域の人々と一丸となって活動をすすめますので、進捗を楽しみにしてください。

マラウィ「子どもの栄養改善と食糧確保プロジェクト」

地域の人々が自発的に啓発活動を始めています

慢性的な食糧不足と子どもの栄養不良が
蔓延するマラウィ。活動地域のムランジェ県で
食糧確保や干ばつへの備えをすすめている
プロジェクト担当者のリポートをお届けします。

リポーター：アラン・ムランジ職員（現地プロジェクト担当者）

コミュニティに出かける車の前で

毎日、コミュニティの人々と接しながら感じるのは、地域の人々が、このプロジェクトをとても喜んでいるという事実です。洪水や干ばつに苦しんできた人々にとって、災害に強い作物づくりは悲願なのです。

地域の人々は、長い間、栽培できる作物はメイズ（とうもろこし）しかないと信じて、それ以外の選択肢を知りませんでした。しかしメイズの栽培には大量の水を必要とします。干ばつになれば収穫はできず、食糧不足に陥ってしまうのです。

このプロジェクトで、キャッサバ、さつまいも、豆類といった、メイズよりも水を必要としない作物の栽培を紹介したところ、その利点をよく理解してくれました。さらに、収穫物が傷まない保存方法のトレーニングを実施。以前よりも栄養価が失われず、長く保存できると知って喜ばれました。

また、このプロジェクトでは乳幼児の栄養改善にも取り組んでいます。親や保護者たちに乳幼児の栄養の大切さを伝えたところ、人々の行動が変わってきました。トレーニングを受けた人々が自発的に、「子どもたちは栄養価の高い食べ物を食べなくてはならない」というメッセージを他の人に伝え、地元の食材でできる料理方法を教え始めたのです。いくつかのトレーニングを通じて、人々の考え方や行動が確実に変わってきているのを感じます。

● このページのプロジェクトは、ともにプラン一般プロジェクトでご支援いただけます。https://www.plan-japan.org/join/priority/

あなたの職場にもある!? 「マッチングギフト」制度を利用しよう

今回ご紹介するのは、企業が社員の寄付活動を応援する「マッチングギフト」という制度。
あなたの勤務先でも導入されているかもしれません！

マッチングギフトとは、社員が行うNGO／NPO団体への寄付活動を応援する目的で、企業が同一の団体に一定比率の金額を上乗せし、資金提供を行うもの。現在、日本でこの制度を導入している企業数は、上場企業・主要未上場企業では20％程度（※）という調査結果もあり、導入している企業は少なくありません。

マッチングギフトにはさまざまな形態があります。たとえば社員が個人として行っているNGO／NPOへの寄付活動に対し、所属企業が社員の申請に基づいて同じ団体に資金を提供するもの、あるいは企業が災害時等に社員に対して寄付を募り、集まった寄付額に応じて企業も資金提供し、合算してNGO／NPOに寄付を行うものなどです。

マッチングギフト制度を利用し、自分の勤務先からの支援を加えることで、個人の寄付額を増やして支援を拡大することができます。勤務先でマッチングギフト制度を導入しているかどうか、そして、その制度をプラン・ジャパンへの寄付に活用できるかどうか、ぜひ一度、勤務先の担当者に確認してみてください。

※出典：『東洋経済 CSR企業総覧』2016年度版。上場企業・主要未上場企業3,630社に対して調査を実施。マッチングギフト制度の有無について回答のあった1,017社のうち、207社が「制度がある」と答えた

マッチングギフト利用者からひとこと！

佐々木クロエさん

タイの教育施設落成式に参加した佐々木さん（後列中央）

私はプラン・スポンサーとして、南米コロンビアのチャイルドと交流しています。あるとき、会社の福利厚生制度をふと見直してみると、私の勤務先にもマッチングギフト制度があることがわかりました。そこで早速、プラン特別プロジェクトとして私が別途寄付した額と同額のマッチアップを申請しました。この寄付はタイ北部山岳地帯の乳幼児教育支援施設の建設に活用され、私も落成式に出席してきたのですが、そのときの感慨はひとしおでした。一個人でできる社会貢献には限りがありますが、今後もマッチングギフトを活用して、プランを通じた子どもたちへの支援を続けていきたいと思っています。

株式会社デンソー　総務部　社会貢献推進室
佐々木朋子さん

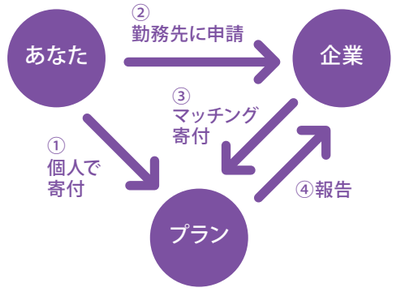
デンソーグループは基本理念のなかで、「世界と未来をみつめ 新しい価値の創造を通じて 人々の幸福に貢献する」ことを使命として掲げ、社会から信頼・共感される企業行動のひとつとして、マッチングギフト制度を実施しています。プラン・ジャパンへの寄付には、1998年から16年間で延べ96人の社員から申請があり、会社も一緒になって寄付を行ってまいりました。私たち事務局は、社員の申請を通してさまざまな社会の課題解決を行うプラン・ジャパンと結びつきを深め、また、社員の気持ちを2倍にふくらませる機会も得て、大変うれしく思っています。

たとえばこんな企業がマッチングギフト制度を導入しています

●アズビル株式会社／azbil みつばち倶楽部　●株式会社大林組　●キャピタル・インターナショナル株式会社　● Google Inc.　●ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会　●株式会社デンソー　●日産自動車株式会社　●ファイザー株式会社　● Fortress Investment Group　LLC　● Marshall Wace Asia Limited　●三井化学チビットワンコイン／三井化学株式会社　●三菱電機 SOCIO-ROOTS 基金／三菱電機株式会社　● UBS グループ（UBS 証券株式会社 /UBS 銀行東京支店／ UBS アセット・マネジメント株式会社）　●株式会社リクルートホールディングス（50 音順）

● 企業のご担当者様へ
マッチングギフトに関するお問い合わせ・お申し込みはファンドレイジング部まで
Tel: 03-5481-7100　Mail: hello@plan-japan.org
https://www.plan-japan.org/company/

マッチングギフト申請の流れ
～プラン・ジャパン支援者の場合



現地報告　コロンビア　シンセレホ活動地域

作家の角田光代さんと一緒に女の子の声を取材してきました！

久保田恭代職員（コミュニケーション部）

From Colombia

（左から）角田さん、活動地域事務所のシリ―所長、久保田職員
［撮影：山田真実］

昨年11月、作家の角田光代さんの取材のお供で、南米コロンビアでの「若年層の女性を中心とした育児と家族計画指導」を視察しました。このプロジェクトではレイプ、DV、子どもへの虐待などに取り組んでいますが、問題の背景には「男は強くなくてはならない」というマチスモ（男性優位主義）の思想があり、これが取材のポイントでした。

訪れたのは、カリブ海に近いシンセレホという街。10代のシングルマザー、マチスモに反対する男の子たち、レイプの被害者を保護する司法担当者など、4日間をかけてさまざまな人を取材しました。角田さんは、どんな立場の人にもとても静かに質問し、そして静かに彼らの答えを受け止めていました。ゲリラや内戦、国内避難民という単語が頻出し、この国がたどってきた波乱の歴史が浮かび上がってきます。カリブの明るい陽光とのコントラストに、めまいがする思いでした。「今から頑張れば、僕たちが年寄りになる頃にはこの国はもっとよくなっているよ」という10代の男の子の言葉を「頼もしい！」と思う一方、ギャングや麻薬と隣り合わせの日常で、彼らが真っ直ぐに生きていくことの困難さも思わずにいられませんでした。

〝支援活動〟といっても、当事者にとっては、よりよい人生に向かっていくための〝日々の営み〟そのもの。それを私たちに伝えてくれる角田さんの記事は、3月発売の雑誌に掲載されています。ぜひお読みください。

角田さんの記事が掲載されている『オール讀物』4月号（文藝春秋）と『SPUR』5月号（集英社）

イベント報告　東京マラソン

東京マラソン2016 チャリティに参加しました！

平本薫職員／大山文子職員（ファンドレイジング部）

From Tokyo

平本職員（左）と大山職員

2月28日（日）に開催された東京マラソン2016。プラン・ジャパンは今年もチャリティ枠のひとつとして参加しました。東京マラソンにチャリティ枠があることは、実はあまり知られていません。そのため私たちは、毎年7月頃から告知を開始します。おかげさまで5回目となる今回は、これまでで最多の140人の方に、チャリティランナーとしてご登録いただきました。大会前に開催されたEXPOでは、最高齢82歳の方やリピーターの方々などさまざまな方にお会いし、皆さまのご支援を実感することができました。今後もより多くの方にご参加いただけるよう、取り組んでいきたいと思います。

ご協力ありがとうございました！
（ファンドレイジング部書き損じはがき・未使用はがきキャンペーンチーム）

今年も多くの方に「書き損じはがき・未使用はがきキャンペーン」にご協力をいただき、ありがとうございました！　7カ国で実施されているプロジェクトに、大切に活用させていただきます。

※15ページのキャンペーン報告もあわせてご覧ください。

プラン・ジャパンから今後のイベントや
キャンペーン等のお知らせです！

INFORMATION

2016年7月1日、「プラン・ジャパン」は「プラン・インターナショナル・ジャパン」になります！

ロゴマークも一新されます！

プラン・ジャパンは、プラン・インターナショナルの一員として1983年に誕生。現在では公益財団法人となり、国内外でさまざまな活動を行っています。このたびプランは、世界70カ国以上で活動する国際NGOとしての一体性を強化し、より効果的で力強い活動を可能にするため、世界的に「プラン・インターナショナル」という名称に統一することを決定しました。それにともない日本でも2016年7月1日より、正式団体名を「公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン」に変更いたします。新たな統一名称のもと、今後もより一層子どもの権利を推進し、貧困や暴力のない公正な社会を実現するための活動に力を注いで参ります。引き続き、みなさまのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

※ウェブサイトのドメイン等は、7月1日以降、随時変更いたします。詳細は、7月中旬頃にお届けする次号で、あらためてお知らせいたします。

たくさんのご意見ありがとうございました！

前回「プラン・ニュース」100号とともにお送りしたご意見カードに対し、幅広いご支援歴の方々から400通を超えるご返信をいただきました。皆さまからいただいた“声“は局内で共有し、今後の運営の参考にさせていただきます。皆さまのご協力に感謝いたします。

いただいたご質問・お問い合わせにつきましては、順次個別に回答をお送りしていますが、なかにはご連絡先の記載がないものもありました。そこで、特にお問い合わせの多かった、プラン・スポンサーシップ関連や活動経費（郵送費）についてお答えします。

Q1：チャイルドになかなか手紙を書くことができず、申し訳なく思っています。

A：「チャイルドの国の文化・慣習がわからない」「最初にどんな手紙を書いたらいいか迷っている」という方は、ウェブサイトに用意している定型文や図柄入り便せんなどをご活用ください。なお、定型文のお手紙（「久しぶりのおたより」）は電話でも受け付けていますので、お気軽にお問い合わせください。

■インターネット・メールで手紙を送る
https://www.plan-japan.org/supporter/br/original.html

Q2：チャイルドとの交流終了後、また同じ国・同じ性別の子どものプロフィールが送られてきたのですが…。

A：チャイルドとの交流が終了するときには、プラン・ジャパンから「チャイルドの登録終了のお知らせ」を郵送します。その際「今度は違う国や性別のチャイルドを」「しばらくはチャイルドと交流せずに支援したい」といったご希望がありましたら、お知らせを受け取ってから2週間以内にご返信ください。ご返信のない場合は引き続きスポンサーシップへご支援くださるものとして、待機しているチャイルドから順番にご紹介いたします。またご支援の中止を希望される場合も、必ずご連絡ください。登録終了のお知らせから1カ月以内に、次のチャイルドのプロフィールをお送りします。入れ違いでご希望に沿わないプロフィールを受け取られた場合には、支援者サポート部までご相談ください。

Q3：活動報告書の印刷費や送付費用なども、支援のために使うほうがよいのでは？

A：「プラン・ニュース」などの印刷物は、皆さまのご寄付で実施している活動についてご報告するものですので、ぜひ内容をご一読いただければ思います。なお、印刷物と同じ内容をウェブサイトでも公開していますので、「郵送不要」という方は事務局までお知らせください。

【お問い合わせ・連絡先】
支援者サポート部　TEL：03-5481-6100
／Mail：service@plan-japan.org

貴重なご意見をありがとうございました！

プランへの寄付となる商品のご紹介

株式会社ドリームの「ブルーリボン」トートバッグ

株式会社ドリームが展開する「アイソシアル」ブランドは、社会問題の解決に貢献する商品やサービスを生み出すこと、自分のためだけではなく誰かの幸せにもつながる商品の提供を目指しています。

同ブランドのラインナップのひとつであるRIBBONSPROJECTでは、好きな色のリボンがついた商品を購入すると、それぞれの色に割り当てられたチャリティ団体に、自動的に寄付が送られる仕組みを構築。2014年に販売を開始したトートバッグでは、プランの色「ブルーリボン」のバッグの売り上げの一部をプラン・ジャパンに寄付してくださっています。RIBBONS PROJECTの詳細については、以下のウェブサイトをご覧ください。
http://ribbons.aisocial.jp/

夏に向けて大活躍間違いなしのさわやかトートバッグ

“東京ヤマソン”に参加しませんか？

東京ヤマソンは、3人または4人一組のチームでJR山手線の一周29駅全駅をまわる、ファンドレイジングのイベントです。主催は、インターナショナル・ボランティア・グループ。参加費の100％が、プラン・ジャパンがフィリピンで実施する「災害に強い小学校校舎建設プロジェクト」に寄付されます。あなたもフィリピンの子どもたちのために、同僚や友人、家族などと一緒に参加して、東京の街を歩いてみませんか？

詳細は以下のサイトでご確認ください。
【開催日】
2016年5月21日（土）
【場所（スタート地点）】
TOKIAビル（JR東京駅・丸の内南口出口から徒歩3分）
【参加費】
1グループにつき1万円
【詳細・お申込み】
https://www.plan-japan.org/yamathon2016/index.html

昨年度のイベントの様子

【お問い合わせ先】
プラン・ジャパン
TEL: 0120-400-422
（受付時間　平日9時～17時30分）

「書き損じはがき・未使用はがきキャンペーン2016」終了 ご協力ありがとうございました！

年末年始の年賀状シーズンに、書き損じたり未使用のまま手元に残ったりしたはがきを有効活用し、途上国の子どもたちを応援するこの企画。今年度は全国7校の学生有志が参加してくださり、皆さまのご協力のもと、5万1,615枚のはがきが集まり、寄付金額は約200万円になりました。ご寄付は7カ国で実施されている、プラン一般プロジェクト支援にそれぞれ充てさせていただきます。ご協力いただいた皆さまに心よりお礼申し上げます。

はがきの仕分けをする学生グループ

■キャンペーン協力校（順不同）：明治学院大学 ボランティアセンター海外プログラム事業部、甲南女子大学 All for Happy Girls プロジェクト、創価大学 SaveChildrenNetwork、昭和女子大学ボランティア委員会、南山大学短期大学部 Nantan Girls Project、富士見中学高等学校ボランティア委員会、宮城学院女子大学 LAC 国際支援活動 Triangle

あなたも参加しませんか？ プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

プラン広島の会 f

『お手紙書き会』

- 日時：4月16日（土）、5月21日（土）、6月18日（土）、7月16日（土）　14時～16時
- 会場：広島市まちづくり市民交流プラザ3Fまたは2Fフリースペース（広島市中区袋町6-36）
- 内容：チャイルドへの手紙書き
- 参加費：無料、事前申込不要
- 連絡先：小村

Mail: naokomura@kej.biglobe.ne.jp

プラン山陰の会 f

『ネパールスタディーツアー』報告会

- 日時：5月29日（日）10時～12時、昼食会13時～
- 会場：松江市市民活動センター（スティックビル）研修室
- 内容：2014年のスタディツアーで、ネパール視察旅行に参加された筒井さん（広島県在住）を初めて本会にお招きします。ネパールの子どもたちに関するお話をうかがいます。
- 参加費：1,000円。報告会は事前申込不要。昼食会は別料金で、5月22日（日）までに申し込みが必要です
- 連絡先：岡川

Mail:leafmoon804@yahoo.co.jp

山形・秋田プランの会

第25回山形・秋田プランの会

- 日時：7月10日（日）13時～16時30分
- 会場：サンパル秋田（予定）（秋田市山王7-3-1　秋田文化会館内）
- 内容：プラン・ジャパン職員による活動報告、チャイルドへの手紙書き、参加者同士の交流
- 参加費：500円。7月6日（水）までに下記へお申し込みください
- 連絡先・申込先：岩谷

Mail:tadaya-i@chive.ocn.ne.jp

プラン岡山の会 W f

プラン職員を招いた講演ほか

- 日時：5月29日（日）　13時～16時
- 会場：岡山県生涯学習センターミーティング室5（http://www.pal.pref.okayama.jp/）
- 内容：プラン・ジャパンの職員をお迎えし、お話をうかがいます（詳細未定）
- 参加費：500円（1家族につき）。事前申込は不要ですが、なるべく事前にご連絡いただけるとありがたいです
- 連絡：プラン岡山の会 お世話人会

Mail: planokayama@excite.co.jp

W ウェブサイト f フェイスブック
上記アイコンのある会については、プラン・ジャパンのウェブサイトから各会のページにリンクできます（https://www.plan-japan.org/supporter/plankai）
支援者の会に関するお問い合わせ先：
支援者サポート部　TEL: 03-5481-6100

※ウェブサイトにはイベントの開催報告も掲載しています。ぜひご覧ください　※「プラン・ニュース」No. 102は、2016年7月中旬にお届け予定です

コミュニティ訪問に
行ってきました！

エクアドル共和国 **ECUADOR**

チャイルドの"卒業"直前 どうしても会いたくて行ってきました！

最初は「友人がやっていたから、私も」と軽い気持ちで
スポンサーを始めた水澤さん。当時3歳だった一人目のチャイルドが
もうすぐ"卒業"を迎えるということで、2015年11月、
10年越しの希望であったコミュニティ訪問へと出発しました。

スポンサー：水澤秀子さん／神奈川県
チャイルド：マリアさん（女の子／訪問時 17 歳）

マリアとは 2002 年 8 月から、年に 3、4 回は手紙を送って交流を重ねてきました。彼女は手紙に何度も「会いたい」と書いてきて、私も 10 年ほど前から「いつか必ず」と考えていましたが、やはり南米は遠く、お金も時間もかかります。でも、「このまま交流が終わったら絶対に後悔する！」と一大決心。1 週間の休暇を取って、エクアドルへと向かいました。

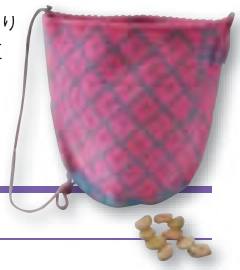
今回の旅では、あらかじめ日本人の通訳兼ガイドさん（必要な日には運転手さんも）を雇っていきました。その料金は思わず"笑ってしまう"ほど高かったのですが、深夜の空港送迎もしてもらい、やはり大変助かりました。

さて、コミュニティ訪問当日。朝 9 時前にプランのスタッフがリオバンバのホテルまで迎えに来てくださり、まずはチンボラソの事務所で 1 時間ほど説明を受けました。お土産は日本からも持参していましたが、コミュニティへの移動中、スーパーに立ち寄って米、食用油、洗剤などを購入。その後は小学校で子どもたちの歓迎を受け、マリアが家族とともに暮らす家に向かいました。

彼女の家は、丘の上にぽつんと立つ小さな一軒家。じゃがいもなどの農業で生計をたてています。長年交流してきた私たちですが、お互い何だか照れくさくて、会話もうまく進みません。家の周辺を散策し、お母さんの手料理の昼食をごちそうになり、私の趣味であるカメラで"撮影会"をしたりしているうちに、あっという間に 1 時間以上が経過。最後にマリアが、手作りのバッグに入った乾燥空豆をプレゼントしてくれて、訪問終了となりました。

彼女に会えただけでうれしくて、実は、話した内容もあまり覚えていないのですが、ひとつ、「食べ物は何が好き？」と聞いたら、目を輝かせて「クイ！」と答えたのが忘れられません。クイ（テンジクネズミ）はお祭りなど特別な日に食べるごちそうなのです。

訪問を終えて思うのは、思い切って行ってよかったという満足感と、もっと早く行けばよかったという多少の後悔。帰国後、現地で撮影した作品がある写真展で入選するという、嬉しいおまけ（？）もありました。今は、マリアがくれた手作りバッグを眺めながら、もうひとりのチャイルドに会うため、ネパールを訪れる日を夢見ています。



マリアさんの手作りバッグと乾燥空豆

旅のスケジュール

2015 年	9/7	プラン・ジャパンに訪問申込
	10/2	「コミュニティ訪問同意書」提出
	11/11	成田国際空港～ヒューストン経由～キト（23：55 着） ※移動時間：約 21 時間
	11/12	午前中：キト観光、午後：キト～リオバンバへ移動
	11/13	コミュニティ訪問
	11/14	リオバンバ～チンボラソ山観光～キト
	11/15	キト近郊のオタバロ等を観光
	11/16 ～ 11/17	キト（0：55 発）～ヒューストン経由～成田国際空港 ※移動時間：約 24 時間 30 分

● コミュニティ訪問は、出発日の 8 週間前までにお申し込みください。
手続き方法などの詳細は、ウェブサイトでご覧いただけます→ http://www.plan-japan.org/supporter/visit/

Plan news
2016 Spring No.101

公益財団法人プラン・ジャパン www.plan-japan.org
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL 03-5481-6100 FAX 03-5481-6200 service@plan-japan.org

表紙写真：カンボジア　シェムリアップの学校